32 遠登志橋

おとしばし

四国別子山村の歴史も平家落人の物語から始まる。この地方には、化粧の水として都育ちの平家の姫君や子供達が渓間の水を汲み、旅の疲れを癒したという伝えのある所もある。

元禄3年（1690）6月、立川銅山（この地域の立川地区）で働いていた住友家経営の吉岡銅山（岡山県）の元鉱夫長兵衛が、銅山峰の南側で有望な露頭を見つけて吉岡銅山の支配人に伝えてから、この奥深く静かな山あいの趣は一変する。住友家はただちに実地調査を行なってこれを確かめ、幕府に採掘の許可を申請した。その3年前（貞享4年）、すでに山中に鉱脈を見つけて盗掘するものあり、彼等も住友の申請を知るや直ちに出願した。

しかし、元禄4年5月9日に住友家は幕府の許可を得、9月22日から採鉱を開始した。そこは歓喜坑と名づけられ、今もその跡は山の頂きに残っている。同年10月12日焼鉱炉に火が入り、鉱山開坑、精錬開始と、世界的な産銅量を誇る別子銅山の操業が始められたのである。

山間の道は採掘が進むにつれて整備されて行き、渓谷の橋は危うい木の橋から鉄の橋も架けられるようになる。採掘された鉱石を端出場（はでば）から新居浜の海岸近くにある惣開製錬（そうびらき）所まで運ぶ軌間762㎜の鉄道も明治26年（1893）に開通した。その終点近くにある打除（うちよけ）橋は、旧トラスの内部に独立した新しい箱桁を架けたものである。両者は縁が切られているので、旧トラスは昔のままの姿ではあるが、いまは列車荷重を受けていない。鉱山の模様を展示した博物館への観光客を運ぶ列車が新橋の上を行き来している。この地区は、鉱山の学習に加えて温泉などもある観光拠点マイントピア別子となって人々を迎えている。

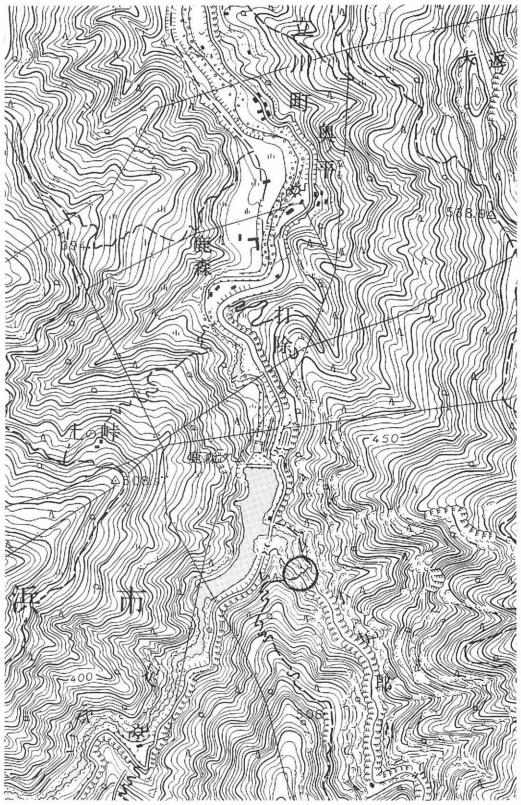
そこを過ぎて1.5㎞あまり、美しい川沿いの道を行くと、真っ赤に塗られ、吊橋とアーチが重なって変わった形の橋に出逢う。これが本文主題の遠登志橋である。このうちアーチ部分は明治38年（1905）ドイツ人の手になった橋である。それを平成5年3月に床組だけ取り外し、上に重なるように新しい人道用の吊橋が架けられたものである。吊橋は旧アーチ橋に重なったように見えるが、これも旧橋とは縁が切られていて、旧橋には荷重を伝えていない。前出の打除橋と同じく、古橋保存の新しい方法として注目される。

明治期に建設された鋼アーチ橋は13橋あるが、往時の姿を見ることができるのはこの橋だけという貴重な存在である。アーチリブはそれほど痛んではいないが、ブレースは相当新材に替えられ、残るものもちぎれかかるほどに腐食しており、長年風雨に耐えた後の痛々しさが感じられる。なお、東京都の奥多摩と愛知県にコンクリートで巻き立てられて現在も使われている明治の橋がある（No.37および39）。

（注：遠登志橋のアーチリブの材質の分析調査がなされていないので、鋼と断定はできないが、その頃のアーチ橋が鋼のため、ここでは鋼アーチ橋の数にいれた。また、形式はスパンドレルブレースドアーチであるが、もともとソリッドリブアーチであったものを、かなり昔に補強改造して現在の姿になった可能性もまったくないとはいえない。）〔ＴＪ〕

竣工年月：明治38年（1905）
所在地：愛媛県新居浜市立川町大永山
河川名：国領川支流の小女郎川
橋長・幅員：48.26ｍ×2.0ｍ
径間数・支間長：1×37ｍ（アーチ支間、概略）、両側に側径間各3連（支間1.2～2.5ｍ）
形　式：スパンドレルブレースドアーチ

〈1993年11月，撮影・共に田島二郎〉



（1:25,000　別子銅山）